

グローバルな人材育成のための学外学修プログラムの成果と課題

—梅春(うめはる)科目による取り組み—

文化学園大学

工藤雅人

1 取組概要

文化学園大学のAP事業は「グローバル創造力」の涵養を目的とし、3年次学生を対象とする8週間の学外学修プログラムと1・2年次学生を対象とする4週間の学外学修プログラム(梅春科目)から構成される。学事歴を考慮し、後期試験終了後(2月中旬)から春期休暇(3月中旬)までの期間約1カ月を「梅春学期」として新設し、同学期中に1・2年次学生向けの科目を開講した。2019年度は国内11科目と海外5科目を梅春科目として開講した。

2 梅春科目における科目設計の工夫

梅春科目では共通して、2～3日間の「事前研修」、3週間～4週間の「学外研修」、2～3日間の「事後研修」を行っている。「事前研修」においては、現地での研修において必要となる知識の習得だけでなく、なぜ履修したかを学生に問いかけ、曖昧になりがちな「履修の目的」の改めて自覚できるように工夫している。現地で実施する3～4週間「学外研修」はそれ自体が得難い経験となるが、何を経験したのか、また、その経験をどのように考えたかを、他の履修学生の報告を聞きながら共に振り返ることで、現地では発見できなかった経験の貴重さや意義を「再発見」できるようになる。この「再発見」された「気づき」は現地での経験と同じくらいに重要なものであるため、「事後研修」を実施している。

3 教育効果の検証①——梅春科目の履修が3・4年次の成績に及ぼす効果

梅春科目履修が3・4年次の成績に影響を与えているかを検証するため、履修者と非履修者によるGPA平均値に差がみられるかをt検定を用いて分析した。その結果、1・2年次の成績が良い学生が梅春科目を履修するという傾向がみられたが、梅春科目の履修が3年次以降の成績に効果を与えるという結果は見られなかった。現時点で梅春科目は、成績が良く意欲の高い学生に対して、通常の科目とは異なる学修の機会提供するものとなっていると考えられる。

4 教育効果の検証②——履修学生へのインタビュー

GPAなど数量的なデータとしては表れない質的な効果を明らかにするために、履修学生のうち3年次前期における成績が1・2年次と比較して大幅に増減した学生を対象に、梅春科目履修中の状況および履修後の意識等の変化について、半構造化インタビューを実施した。その結果、大学では学べないこと(オリジナルの布地の作成や工場における専門的な縫製工程)を経験できたと答える学生は、その経験を大学での学びに活か(そうと)している傾向があること、また、履修を通して、新たな目標を発見するのではなく、それまでもっていた目標が梅春科目の履修によって明確となり目標達成にむけた具体的課題に気づく傾向があることが明らかとなった。

5 今後の課題

今後克服すべき課題は多数あるが、負担の軽減、科目運営の効率化、履修希望者の創出が大きな課題と考えられる。現在は科目担当教員が宿泊先や移動手段の手配を含め、ほぼすべての運営を担当しているため、プログラム内容の充実には分業や旅行会社の効率的利用など負担軽減への工夫が必要である。また、教育効果を考えれば履修学生は5名程度が望ましいが、一人の教員が担当できる科目は基本的には1科目程度であり、科目を増やし続けることは難しく、科目運営の効率化が求められる。さらに、金銭的・地理的理由から最低催行人数に履修希望者が達しない場合があるため、説明会などによる学生へのさらなる周知が必要である。